

たまねぎ・マルチ（品種：ソニック）

長生農林振興センター

1 地区名（集団名）

長生郡白子町（白子町玉葱出荷組合）

2 栽培戸数、面積、収穫量又は出荷量、出荷先又は販売方法

- (1) 栽培戸数 1組合
- (2) 栽培面積 13a
- (3) 収穫量又は出荷量 3,900kg
- (4) 出荷先又は販売方法 「白子たまねぎ祭り」での直販

3 ちばエコ基準達成状況

区 分	実施状況	ちばエコ基準
化学合成農薬(成分回数)	5回	8回
化学肥料（窒素分量）	12kg/10a	12kg/10a

4 事例のあらまし

白子町の主要品目の5月収穫のたまねぎにおいて、白子町玉葱出荷組合が中心となり、「ちばエコ農産物」栽培基準での栽培に取り組みました。その結果、化学合成農薬の使用回数は5回、化学肥料由来の窒素成分は12kgと、「ちばエコ農産物」栽培基準内で栽培することができました。栽培圃場は「たまねぎ祭り」での販売を目的に白子町玉葱出荷組合の組合員が総出で定植から収穫まで管理し、収穫したタマネギは平成18年5月14日に行われた「第6回白子たまねぎ祭り」の会場で来場者に販売され、大変好評でした。

5 背 景

白子町のたまねぎ栽培の歴史は大正時代にさかのぼりますが、急速に面積が拡大したのは、マルチ栽培による早出し栽培が可能となった昭和30年後半で、昭和41年には国の指定産地となりました。

しかし、近年は高齢化や労力不足、価格低迷等の理由により生産量は年々減り、栽培者数も最盛期の4割まで減少してしまいました。その一方で5月上旬に他の産地に先駆けて出荷され、また水にさらさなくても生で食べられるほど甘みが強いたまねぎは、食味においては高い評価を得ています。

白子産たまねぎの美味しさを多くの消費者に知ってもらおうと、6年前から毎年5月に「白子たまねぎ祭り」を開催し、新たな販売方法としてたまねぎ狩りも行われるようになりました。その甲斐あって口コミで徐々に知名度は高まり、たまねぎ狩りの来場者

も毎年前年対比で200%以上の伸びを示すほど人気となりました。

白子のたまねぎの味の秘密は、冬でも温暖な九十九里浜の海の恩恵をうけた環境で栽培されていることに加え、生産者自身が食味の良い品種を選定し、積極的に堆肥を使った土づくりを行ってきたことにあります。

このかけがえのない生産環境を守り、さらに白子産たまねぎの魅力をアップさせるためにも、出来るだけ環境に配慮した栽培を行い、その取り組みをきちんと消費者にPRしていくことが必要と考えました。そこで千葉県が推進する「ちばエコ農業」に玉葱組合が一丸となって取り組むことになりました。



組合員全員で定植作業を行う



6回目を迎えた「白子たまねぎ祭り」

6 栽培方法

(1) は 種

高温期のは種のため、立枯病が問題となる時期です。発病後の防除は難しいため、予防策として立枯病の防除薬剤を粉衣した種子を使用しました。また、台風や大雨等による冠水被害を出来るだけ受けないように苗床は高畝としました。

(2) 育 苗

発芽揃いまでは特に多くの水を必要とするため、高温多湿になりやすく立枯病の被害が最もしやすい時期です。発芽までは寒冷沙やワラで被覆し地温が上がり過ぎないようにし、発芽後は徐々に灌水を減らしていき、徒長を防いで健苗に育てることで、病気にかかりにくい苗に育てていきました。また、除草剤を使用する代わりとして手作業による草取りを1回実施しました。苗床から本圃への病害虫の持ち込みは、防除を困難にし、薬剤散布回数の増加にもつながってしまうので、苗床での病害虫の防除を徹底しました。このため、病害虫の発生源となる雑草の除草を行い、苗床での薬剤防除においてはむやみに回数を抑えるのではなく、予防散布に重点を置き、定期的な薬剤散布を実施しました。

(3) 施 肥

堆肥を十分に施用することで、基肥、追肥ともに減らし、堆肥以外の窒素施用量

を慣行の半分以下に抑えることができました。また、地力が向上したことで、根張りが良くなり、堅強な株に育ち、病害の発生が少なくなったことで、薬剤防除の回数も最小限に抑えることが出来ました。

(4) 定植

雑草を抑えるため黒マルチを使用することで、定植時の除草剤散布1回で雑草の発生をある程度抑えることが出来ました。また、タネバエ対策としてダイアジノン粒剤5を使うことで、被害の大きな定植～活着までの期間の寄生を防ぐことが出来ました。マルチの穴の間隔は慣行では条間15cm、株間12～15cmのものが使用されていますが、当栽培では株間の一番広い15cmの有孔マルチを使用しました。株間が広がることで栽植本数は減ってしまっていますが、肥大は良くなり、株と株の間隔にも余裕が生まれるため、通気性が向上し、病虫害の発生が少なくなりました。

(5) 本圃での管理

基肥の窒素施用量は3.1kgと慣行の3割弱の窒素成分量とし、その代わりに豚糞堆肥を施用し窒素成分の不足分を補いました。本年は記録的な寒さのため、初期生育の遅れが見られたため、2月10日に速効性の硫安の追肥を行いました。それでも通常は3～4回行う追肥の回数も2回で抑え、十分な収量を得ることが出来ました。

ア 栽培管理

作業名	実施年月日
前作収穫収量	平成17年5月5日
耕起	10月15日
播種	9月20日
施肥	12月2日
定植	12月2日
追肥	平成18年2月10日、3月15日
収穫開始	5月12日

イ 使用資材

(ア) 土づくり・施肥等

(10aあたり)

使用銘柄 (N:P:K)	実施年月日	施用量	全N	化学N
豚糞・籾殻堆肥	平成17年10月25日	5 t		
野菜美人	12月2日	30.8kg	3.1kg	3.1kg
野菜美人	平成18年2月10日	4.8kg	0.5kg	0.5kg
硫安	2月10日	23.1kg	4.7kg	4.7kg
NKグリーン	3月15日	23.1kg	3.7kg	3.7kg
合 計			12.0kg	12.0kg

(イ) 病害虫・雑草防除等

使用農薬	対象病害虫	実施年月日
※オーソサイド水和剤80	苗立枯病	粉衣済種子を購入
ダコニール1000	べと病、灰色かび病	17年10月4日、10月15日、11月7日
ゴーゴーサン乳剤30	畑地一年生雑草	12月2日
ダイアジノン粒剤5	タネバエ	12月2日
化学合成農薬使用回数5回（総使用回数5回）		

※印は、購入種苗の消毒はカウントしない。

7 今後の展望等

本年の冬は記録的な寒さとなり12月から厳しい冷え込みが続いていました。通常たまねぎの定植は11月中旬に行われますが、苗の準備が間に合わず、定植は12月2日になってしまいました。堆肥を十分に施用してはいるものの、基肥、追肥をあわせた窒素施用量を、慣行の半分以下に抑えたため、収量品質の低下が懸念されましたが、寒さと12月定植による肥大の遅れはあったものの、「ちばエコ農産物」栽培基準による収量品質の低下はありませんでした。堆肥を十分に施用することで化学肥料の代替は可能であり、食味に与える堆肥施用の効果を考えて、食味の良さで差別化を図っていく上で、ちばエコ農業の取り組みは望ましい方向であると感じました。

たまねぎでは定植後は気温も低下するため病害虫の発生も少なく、ほとんど防除の必要はありません。そのため苗床での防除が中心となります。葉たまねぎで苗床の太陽熱消毒の実証を行ったところ、雑草の発生が長期間にわたって抑えられ、苗床で問題となるべと病の発生もほとんどありませんでした。

次年度はたまねぎの苗床についても太陽熱消毒による病害虫、雑草の防除などの耕種的な防除法についても実証を行っていくほか、登録農薬の少ない葉たまねぎで多く使われている銅水和剤、微生物農薬についてもたまねぎで実証を行っていきたいと考えています。

また、施肥についても肥効調節型肥料や、より有機質含量の高い肥料の利用など、減肥と品質向上の両方につながる施肥技術の向上についても検討を行っていく予定です。そして、ちばエコ農業が標準の栽培技術となるよう、環境にやさしい栽培技術を普及推進し、白子産たまねぎのファンを増やしていくことで、販売促進とちばエコ農産物の消費拡大にもつなげたいと考えています。